

第4回 ふたりとも大学教員の道を歩めたのはどうして？ちょっとマジな話



医学部は講座制ですが、経済学部は講座制を採りません。
医学部の講座には、講座の定員にしたがって、助教、講師、准教授、教授がいます。
当時は、ヒエラルキーが厳然とありました。
今も昔も**教授の枠が空席にならない限り、教授にはなれません。**

一方、経済学部では、教授や准教授や講師の総数は決まっていますが、
一人に一部屋が等しくあてがわれ「一国一城のあるじ」となります。
おのずと、そこには上下関係ができません。
教授への昇進や就任は、候補者の実力でほぼ決まります。

ですから、30台後半から40台前半で教授に就任するケースもザラです。
しかも、夫が選んだ大学院は大学院教育のカリキュラムが堅牢で、
研究指導も先導的なことから、大学院修了生の多くはいろいろな大学に嘱望されて就職しました。

そこで、私より夫の大学教員への就任とキャリアアップを優先することに決めました。

一方、私はというと相変わらずの「研究、時々バイト医師」状態で、
好きな基礎の研究を続けるか、はたまた、臨床医になるかと悶々とし、決められずにいました。

所属していた臨床講座には教員の空席が無く、潜り込む余裕はありませんでした。
かと言って、基礎研究を続ける能力が自分にあるのかと自問をしても、
答えはいつも、「無理かも?!」でした。

実際、免疫学はまだ始まったばかりで、
コアな免疫学者は、私が所属していた大学内にはいませんでした。
そこで心機一転。米国で研究の武者修行をすると決めたのでした。

同じ頃、夫も留学を希望。
こうして、ふたりして同じ大学に留学する道を探しました。

米国では、これまで全く知らなかった最先端の免疫学研究を目の当たりにしました。
さらに、ひょっとしたら私でも基礎研究で生きていけるかもと背中を押してくれました。
こうして、帰国後しばらくたってから、私の大学での研究生活が遅ればせながら始まるのでした。
母校の医学部の助手（今の助教）になりました。

おんとし40歳。
末っ子が保育所の年長さんになる頃のことでした。

夫の研究は、コンピューターを使ったデータ解析が主です。
一方の私の研究は、モデル動物や細胞を使ったもので、研究室に出かけないとできません。
プロモーションを目指して研究にキューキューしていた夫ですが、
家では料理や洗濯といった家事・雑用（チョア）に加えて子育てもちゃんとシェアしていました。

しかも、保育所や小学校の授業参観や運動会や学芸会などの行事のほとんどは夫が参加しました。
また、発熱などで急に子供を迎えに行く場合も、ほぼ夫が担当しました。
私はというと、「背中で子育て」をしていました。

わが家のルールブック：

子育てについては意見を統一して、ふたりとも同一路線を進むと決めていました。

一方、チョアについては、やり方や結果については、お互い批判しないという暗黙の鉄則がありました。
たとえば、掃除残しがあっても目をつむり、メシがまずくても文句を言わないといったことです。

そんな中、夫は超合理的だと「週決まりの夕飯メニュー」開始を声高に宣言したのです。
実は、子供たちは、夫が当番の日のこの「毎週同じメニュー」が大の苦手でした。
とりわけ甘口マーボー豆腐は総スカンでした。

私も……
ぐっと我慢の日々でした、とさ。

